

サヴェリエフ E.И.

チェーホフのサハリン島住民調査資料の学術的刊行

チェーホフは1890年に、ロシアにおける流刑と徒刑の地として有名なサハリンで3カ月を過ごした。北から南へと移動し、ほとんどすべての村を訪れた。この旅の成果である著書『サハリン島』は、チェーホフが「地獄のようだ」と評した島に世間の関心を引きつけた。彼はスヴォーリンへの手紙に「サハリン、それは堪え難い苦しみ土地です。その苦しみに堪えられるのは、心の自由な人間と拘束された人間だけです。残念なことに私は感傷的ではありませんが、もし私が感傷的なら、サハリンのような場所には、トルコ人がメッカに行くように礼拝に行くべきだ、船乗りや監獄学者は、軍人がセヴァストポリスを見るようにサハリンを見るべきだ、と言ったことでしょう」と書いている。それ以来多くのことが変化したが、サハリンの地には今も、作家が直接会った人々の子孫が住んでいる。彼らにとって帝政時代の徒刑地こそ故郷であり、偉大な作家のサハリン滞在と結びついていることはすべて、故郷の歴史の一部なのである。

ロシア国立図書館（РГБ）とロシア国立文学芸術文書館（РГАЛИ）に、『サハリン島』執筆の準備資料が保存されてきたが、それは研究者たちの狭い世界でのみ知られ、その大量の主要部分が出版されたことはなかった。それは、チェーホフがもつぱら「大多数の流刑囚の生活をよりよく知る」目的で、住民調査を行うために作成したカード群のことである。「住民調査のために私はカード・システムを使い、すでに約1万人の徒刑囚と移住民を書き込みました」と、作家はやりとげた仕事の規模についてスヴォーリンに伝えた。周知のように、チェーホフは調査カードの大部分をモスクワに持ち帰った。それらに含まれる内容の学術的価値は、疑いようがない。しかし、チェーホフの手で書き込まれたカードの独自性にもかかわらず、この大量の原資料は、その膨大さのために今日まで学術的に利用されることがなく、チェーホフ全集にも含まれていなかったことを指摘しなければならない。

調査カードの一部を刊行する試みは、何度か行われた。最初の試みのひとつは、文学博士M. П. セマーノフによるものである。セマーノフはチェーホフ全集の『サハリン島』の巻の注を書いたときに、カード原本の写真を図版として載せた。ロシア国立図書館員C. H. イヴァシキン、アレクサンドロフスク・サハリンスキー市チェーホフ記念歴史文学博物館長T. Г. ミロマノフ、ユジノ・サハリンスク市チェーホフ『サハリン島』博物館長И. А. ツペンコーヴァも調査カードの刊行を試みた。その他に、モスクワに保管されている調査カード原本に当たったのは、B. Г. カターエフ、E. M. サハロワ、Э. Я. ポロツカヤ、Г. И. ミロマノフ、A. C. メルコワ、И. А. ギトヴィチ、A. П. クジチェワなどであった。

資料の独自性、重要性、これを広く社会的共有物にしたいという願いが出発点となって、サハリンの学者や文書館員たちは、すでに1980年代に住民調査結果の完全な学術的刊行を思い立った。90年代の末にようやく、その実現に向けて実際的な歩みがはじまった。

大量の資料全部を明らかにし、コピーして、サハリンへ届ける作業の最初の段階で、学術的出版にとって肝要な問題のひとつである、原資料の完全性という問題が持ち上がった。。1890年

に記入されて、今日まで保存されてきたカードの正確な数をつきとめることが、どうしても必要になったのである。

チェーホフ自身が1万枚のカードに記入したと語り、彼に続いてすべての研究者がそう語ってきた。これはまったく現実的な数字である。公式データによれば、1891年1月1日にサハリンには16000人が住んでいた。

作家が記入したカードの大部分は、ロシア国立図書館手稿室（Ф. 331、ボックス 4-18）に保管されている。このフォンドのうち2枚が、1958年7月に、ヤルタとタガンローグの「チェーホフの家」博物館に送られた。ロシア国立文学芸術文書館には、チェーホフがドゥエ哨所て記入したカード222枚が保管されている（Ф. 549. Оп. 1. Д. 23）。

チェーホフ全集第14・15巻の注に、「チェーホフ資料として、調査カード（質問とその順番は、作家自身が考案した）7600枚が国立レーニン図書館（現在：ロシア国立図書館）、222枚が国立中央文学芸術文書館（現在：ロシア国立文学芸術文書館）に保管されてきた」とセマーノフ教授は書いている。

我々は国立図書館手稿室と国立文書館で1枚1枚原本に当たった結果、最終的に正確な数字をつきとめることができた。それは7445枚、それにヤルタの「チェーホフの家」博物館の1枚である（残念ながら、タガンローグの博物館は、カードのコピー提供に関する照会に応じられなかったため、この1枚は原稿に含まれなかった）。このようにして、作業の結果、保存されてきた資料全体がサハリンの研究者の手に入り、その後それらは分類された。

コピーは管区ごとに分けられ、それから村、そして戸ごとに分けられた。戸では戸主、家族、同居人、間借り人が提示される。この重要で面倒な仕事を担当したのは、ユジノ・サハリンスク市チェーホフ『サハリン島』博物館の館長И. А. ツペンコーワとフォンド管理者А. И. シュミーロワである。

作業の次の段階は、テキスト伝達の方法を決めることだった。編集グループは、表形式を含む様々な方法を提案した。最適な方法として選択されたのは、繰り返されている部分は条件的に表示して、テキストを短縮した形で伝える方法であった。調査カードの13の項目（質問を並べた部分）は、活字で組まれていて全てのカードで同一なので、省略される。第1行では監視所か村の名、第2行では役所の登記簿による家の番地、3行目は回答者の身分、4行目は名前、姓、父称、5行目は年齢、6行目は信仰、7行目は出生地、8行目はサハリンへ来た年、9行目は主な職業、10行目は読み書きできるか、11行目は家庭状況、12行目は国庫から扶助を受けているかという項目だ。13行目には、回答者の病気についての情報が記載された。これらの項目に順番に番号をつけ、普通の書体で組んだ。例外は第一の項目（村の名）で、これは見出しとして独立させた。何より反復を避けるためであった。

刊行準備作業の次の段階は、古文書（カード）を読み取って処理する作業であった。ユジノ・サハリンスク市チェーホフ『サハリン島』博物館館長И. А. ツペンコーワが、この作業をはじめた。すぐに、一人でこれをやるのは難しいことが明らかになり、手稿を整理する作業は、サハリン州国立文書館の資料公刊学術利用課に集中された。課員H. B. ベロノソワ、T. A. ムシチ

エンコ、И. А. カルトウヒナがこの仕事に参加した。彼らによって、資料の主要部分が整理された。

原資料は様々なレベルで豊富な情報量を持つことを、指摘しておく必要がある。研究者たちにとって特に重要な学術的価値を持つのは、原資料の手書き部分である。チェーホフ自身が面談した場合は、調査カードはほぼ完全に記入されている。登記簿や戸籍簿のデータを記入した場合は、13項目のうち6-7項目が空白で残されている。刊行の際、記入されていない項目は省略した。原資料の手書き部分はゴチック体とした。項目の全部もしくは一部を、チェーホフ以外の人物、チェーホフを手伝ったИ. А. ブルガレヴィチかイラクリー神父が記入したと研究者が認めたカードがある。その大部分は、19世紀末にサハリンでもっとも大きかった村（アレクサンドロフスク哨所、ルイコフスコエ村、アンドレエ・イワノフスコエ村）のカードである。刊行の際、作家以外の人物が記入した部分は、基本テキストよりもポイントを小さくした。我々の見るところ、カードには全部で4つの筆跡が現れているが、ボランティアで作家を手伝った人のうち誰がどの村で手伝ったのか、今日でも確定できていない。チェーホフが調査カードの記入に他人の助けを借りたのは、アレクサンドロフ管区とトゥイム管区であり、コルサコフ管区では一人で作業を進めたことを指摘しておきたい。

記入の大部分は、ペンもしくは普通の黒鉛筆が使われている。記載には省略が多く、原則として省略なしに書かれているのは、回答者の名前、父称、姓だけである。文書解読が特に困難だったのは、まさにこの第4行-名前、父称、姓の欄である。チェーホフは耳で聞き取って記入したので、家族の中で同一の姓が違う表記になっている場合も少なくない。チェーホフ自身が『サハリン島』に「名前のことで思い出せるのは、私はタタール人の女性の名前を一つも正確に書けなかったらしいということだ。タタール人の家庭では娘がたくさんいても、父親も母親もほとんどロシア語を解せず、要領を得ないので、あてずっぽうに書かざるを得なかった。公の書類でも、タタール人の名前は不正確に書かれている。(…)タタール人の姓は、身分権をすべて剥奪されているにもかかわらず、サハリンでも、高い身分や称号を意味する接頭辞や敬称を保っていると、私は聞かされた」と書いている。同じ第4行に作家は、カード記載の人物と戸主の関係を記入した。妻、息子、内縁の妻、嫡出子あるいは私生児、実子あるいは養子、時には養父などである。作家が洗礼を受けていない子どもを記入している場合、我々は補足作業を行い、情報をサハリン島教会戸籍簿で確認し、それを注に記載した。

次のような場合に、我々はテキストに注を施した。言葉が2度書かれ、1つは黒の鉛筆で、そのすぐ隣にペンで書かれている場合。テキストは鉛筆で書かれ、ペン書きの線で囲まれている場合（カロリーナ・アンテル=フリテルのカード）。言葉の最終音節が鉛筆で訂正されているなどの特徴。テキストへの注で、我々は「～と書かれている」という語を使った。というのは、テキストがその場で最後まで書き上げられたものか、それともテキストの訂正やその後の作業の際に書き入れたのか、確定できなかったからである。線で消された語がある場合は、山カッコ〈 〉に入れた。省略された語は完全な形に復元し、復元された部分を角カッコ[]に入れた。テキスト上の間違い、言葉の間違いはそのまま記載して、注に「原文のまま」と入れた。

解読できなかった部分は点線罫（…）で記し、注に欠字の理由とその分量（字数）を記載し、想定される読みを挙げた。注には番号を付し、脚注とした。調査カードが印刷されている紙の特徴も、注に記載した。

よく知られているように、作家は女性のカードに赤鉛筆で横線を引いたが、これについては注には記載しなかった。

第11・12項目では、調査者は必要な答（読み書きできる、読み書きできない、教育を受けた；故郷で結婚していた、サハリンで結婚している、寡婦である、独身である）にアンダーラインを引いている。第11項目について、作家は『サハリン島』で次の説明をしている。「形式上ではなく実際に独身生活を送っている者は、たとえ妻帯者となっても、『独り者』と記すのを私は余計なこととはみなさなかつた」12行目（国庫から扶助を受けているか。はい、いいえ）でも、調査者は選ばれた答にアンダーラインを引いている。我々の出版では、10-12項目はイタリック体で組まれた。

表の面に書き込みのあるカードは多かつたが、コピーで仕事しているときには書き込みの意味はわからなかつた。それはまず、チェーホフが黒鉛筆でカードの下に記した数字である。またチェーホフは時々カードの上部か下部に、記載される者の所在地について、「マウカ在」とか「当局の許可によりウラジオストク在」等の補足を書き込んだ。刊行の際に編集グループは、これらの情報を伝達するために第14項を設けた。コピーでは、チェーホフのこうした注記の部分が切れているものが多かつた。

基本的作業を終了して、送られてきた原稿とカード原本の照合がどうしても必要なことが明らかになった。この作業のため、サハリン州文化局の協力を得て、サハリン州国立文書館から館員T. A. ムシチェンコとE. И. サヴェリエワがモスクワに出張した。ロシア国立図書館・ロシア国立文学芸術文書館における照合作業の結果、チェーホフの書き込みを解読して復元することができた。カード原本を分析して、なぜカードの下の部分に黒鉛筆で数字が記入されているのか理解できた。解答は単純だった。チェーホフは『サハリン島』で子供たちに関する章を執筆するために、子供のカードを選び出して年齢別に分類した。黒鉛筆で各年齢グループに番号をつけると同時に、村や哨所ごとに回答者全体の集計も行った。したがって我々は第14項に、まず村・哨所全体での番号、次に子供としての番号を記載した。

一部のカードは、裏面にチェーホフによる書き込みがあった。これは主に、大きな村で数戸を調べた後に統計上の計算をしたものであった。この書き込みも第14項に入れられた。

モスクワでの原本照合によって、新たな謎も生じた。カードに記入する際、もしくはそれ以後の作業の際に、ペン、黒鉛筆、赤鉛筆の他に、チェーホフが青鉛筆も使ったことがわかつたのである。言うまでもなく、彼は偶然にそれを使ったわけではない。我々の分析は、「青鉛筆の謎」の解決へと導いた。我々の見解ではチェーホフが青鉛筆を用いたのは、看守やその家族など徒刑制度側の人間に「仕えている（＝召使いをしている・訳者注）」人々のカードをチェックするためだった。青い縦線の他に、チェーホフは何枚かのカードでは年齢の項目を青で囲み、さらに何枚かでは縦線ではなくジグザグを書いている。

カード上の3種類のスタンプの跡（不鮮明な工場印）も、我々の「モスクワでの発見」となった。それらはコピーでは判別できていなかった。周知のように、カードはすべてアレクサンドロフスク監視所の警察署付属印刷所で印刷された。カード上で明らかに読み取れるのは、「ジヤトコフ会社No.4, 7」と「ГБАНo.4」という押印である。これらの特徴は、テキストの注に反映された。

ブラン斯拉フ・ツィスレフスキーのカードと、パレヴォ村の全カードは中央を貫いた穴があるが、それ以外はすべて物理的に良好な状態にある。

以前にコピーされていなかった130枚が「見つけ出された」ことも、非常に重要だった。

我々がごく短期間に行った原稿とカード原本の照合作業は、次の方々の協力なしでは不可能であった。サハリン州文化局次長P. ブリノフ、文化省、ロシア国立図書館館長B. フョードロフ、同手稿室長B. モルチャーノフおよび同課員の方々。我々は、これらの方々全員の協力に心から感謝する。

サハリンへ届いたコピーを全部集めて、我々はふたたび最重要と思われる質問に答えようと試みた。それは、「実際、調査カードは何枚記入され、何枚保存されたのか？」という問いである。『サハリン島』で作家はほぼ村ごとに情報を与えているので、我々はそれらの数字と入手資料を比べることができた。

情報が完全に一致するのは、次の村々であった。アレクサンドロフスク管区ではクラスヌイ・ヤール (90)、アルコヴォ宿場 (11)、ヴィアフトウイ (17)、ヴァンギ (13)；トゥイム管区ではヴォスクレセンスコエ (183)；コルサコフ管区ではマウカ (38)、一の谷・二の谷・三の谷（作家による総計46）、リュートガ (53)、ゴールイ・ムイス (24)、ミツリカ (25)、リストヴェンニチノエ (15)、ホムトフカ (38)、大エラニー (40)、ルゴヴォエ (74)、ベレズニャキ (159)、シスカ (7)。

他の村では次の状況が観察される。アレクサンドロフスク管区：アレクサンドロフスク村（『サハリン島』には情報がない、我々の資料では95）、アレクサンドロフスク哨所（『サハリン島』で1499、我々の資料で1338）、コルサコフスコエ (272-260)、新ミハイロフスコエ (520-446)、ブタコヴォ (39-24)、アルコヴォ哨兵線（『サハリン島』には情報がない、我々の資料では4）、第一アルコヴォ (136-104)、第二アルコヴォ (92-86)、第三アルコヴォ (41-35)、ムガチ (38-35)、タンギ (19-15)、ホーエ (34-31)、トラムバウス (8-6)、ドゥーエ (291-274)。

トゥイム管区：上アルムダン (178-175)、下アルムダン (101-95)、デルピンスコエ (739-632)、ウスコヴォ (77-68)、レイコフスコエ (1368-1266)、パレヴォ (396-283)、小トウイモヴォ (190-177)、アンドレエ・イワノフスコエ (382-364)。

コルサコフ管区：コルサコフ哨所 (163-148)、ポロアントマリ (72-67)、ソロヴィヨフカ (74-69)、ヴラジミロフカ (91-89)、ポポフスキエ・ユルトウイ (111-110)、クレストウイ (90-89)、大タコエ (71-68)、小タコエ (52-48)、シヤンツィ (74-71)、ドゥプキ (44-41)、タライカ越冬地（『サハリン島』には情報がない、我々の資料では1）。

結局、チェーホフの『サハリン島』の総計8095に対して、我々の資料では7446であった。

まだ文書解読を進めている時期に、調査資料を扱う作業は電子データベースがなくては非常に困難なことが明らかになった。この課題を解決したのは、サハリン州国立文書館のプログラマーB. M. ヴォロビヨフであった。彼が作ったプログラムのおかげで、ほぼ瞬時に必要な情報を探しだすことと、資料に統計的処理を行うことが可能になった。原稿作成の作業中にすでに、文書館員たちはこのプログラムのおかげで、資料を使って系統的調査を行うことができた。

作業の最終段階-我々が訂正をすべて書き込み、あらたに出てきたカードも補足された段階で、ヴォロビヨフはもう一つプログラムを開発した。コピーでの作業で避けられない多くの不正確さを回避し、氏名索引を作ることができるプログラムである。氏名索引にはアルファベット順に、回答者の姓、名、父称、彼が調査を受けた村、その村での通し番号が記載される。

この非常に緊張した時期、住民調査資料の仕事全体は、次のように分担された。トゥイム管区のカードの刊行準備にはサハリン州文書管理局長T. A. ムシチェンコ、アレクサンドロフスク管区は文書公刊学術利用課主任学芸員M. B. グリジャエフ、コルサコフ管区はサハリン州国立文書館副館長E. M. サヴェリエフ。資料解読作業と平行して、注執筆の作業も進化した。

歴史的な注は、ピウスツキ記念住民研究所所長B. M. ラートウイシェフが執筆した。その際、『サハリン島』その他の出版物と、サハリン州国立文書館資料が利用された。M. A. ツペンコーワによって、「チャーホフのサハリン旅行記録」が準備された。図版の選択はサハリン州国立文書館のE. M. サヴェリエフ、H. B. チェカノフ、O. B. ドヴォリャシナ、ユジノ・サハリンスク市チャーホフ『サハリン島』博物館のM. A. ツペンコーワ、B. B. オフチニコワが行った。国立中央映画写真音声資料館（サンクトペテルブルグ）、国立文学博物館、ロシア国立図書館、サハリン州国立文書館、サハリン州郷土誌博物館所蔵の資料が使用された。

この仕事にあたったグループ全体の学術的コンサルタントは、サハリン州文書課課長・歴史学博士候補・ロシア連邦功労労働者A. M. コスタノフであった。

住民調査の学術的刊行は、『サハリン島』のテキストと併せて、革命前のサハリン史の資料的基盤を拡げることに結びつくであろう。

望月恒子訳